



モブ二人がロビーでシドを罵倒してなんぞかマッシュサーベントを漕ぎ着けた

「言われた通り用意された衣装を着たけど」

「マッシュサーベントをするだけなのになんでこんな格好をしなくちやいけなのよ」

「大手のエステでもやってますんで気にしないでください」

「気にするなって言われてもほとんど布地がないじゃない」

「こうやって立ってるだけでも恥ずかしいんだからね」

「シド君もお姉さんが綺麗になるって聞いて楽しみにしてましたよ」

「あの子がそういうのに興味あるとは思えないけど……」

「あいつよくお姉さんのこと自慢してますからね！ やっぱ嬉しいと思いますよ」

「はあ、まあいいわ。シドの勧めじゃなかったら来なかったけど」

「せっかくだから効果期待してるわよ」



「おっぱいの方失礼しますねー、うおでつか……」

「ちよ、ちよつと……ごまで触るなんて聞いてないわよー！」

「バストアップに効果がありますからすこーしだけ我慢してくださいね」

「触り方がいちいちいやらしいんだけど」

「やっぱりエッチなことが目的でやってるんじゃないの?」

ぎゅー

「そ、そんなことないですつて」

他の人も同じようにやられていますよ」

「普通ならこんなことありえないわよ……今回だけは我慢してあげるけど」

（乳首をピンピンにおっ立てて言う台詞じゃないよな）

（ここに来る20分前に学園で媚薬を飲ませておいたから

もう随分効いてる頃じゃないですかね）

はぁ♡

んっ♡♡

どっ

「全身もしっかりほぐしていきますからねー」

「もう少し足を広げてください」

「太ももから股関節へ溜まったリンパの流れもよくしていきますんで」

「んんっ！くっ……はあ……はあ……」

「や、やばい……身体を弄られてるだけなのに……ちやいさ……なんでも」

はっ

んっ

「そんなに力まなくても大丈夫ですよ、ほら深呼吸深呼吸」

「快楽をこらえるのに必死ですねー、少しおま○こに触れても気付いてないですし」

「ど、どきどきと粉れてどきどき触つてんのよ……んっ」

「気付かれてんじやねーか」

「けど抵抗はしてこないですよ、しもつと触つても大丈夫みたいです」

びん

びん

びん



ゴメン



むむ

むむ

ゴクッ



むむ

むむ

むむ

「お尻もやっついていくんでしっっかり足を持ち上げてくださいなね」  
「この姿勢死ぬ程恥ずかしいんだけど」

「すっごい眺めですね」

「おやお姉さん、もう股間がぐしょぐしょに濡れてますけど  
どうしたんですか？続けても大丈夫ですか？」

「どうしたってアナタ達のせいでしょ……  
いちいちそんなこと聞かないでもう黙って続けてよ」

ドキ♡

キュン♡

ドキ♡

キュン♡

（もう準備万端って感じだな）

（このままむ股間にしゃぶりつきたいですけど  
まだマズいでしょうか？少しくらいなら……）

「ちよ、ちよっとそこの坊主頭、顔が近いから少し離れて」  
「へへへ……すみません」

（あのまま放っておいたら何するつもりだったのかしら……）

「もう随分濡れてきたのでおま○こもほぐしていきますね」  
「ちよつと……ど○こに手を突っ込んでるのよ○この馬鹿！」  
「大人しくしてくださいねーすぐに気持ちよくなりますから」

ゾクゾク♡♡♡

アハハ

はぁ♡♡

はぁ♡♡

「○こをほぐすと女性ホルモンが分泌されて綺麗になるんですよ」

「皆さんもやられてますし綺麗になった姿をシンドのやつに見せてやりましょうよ」

「んんっ、ってデキトーな○こと言っつてんじやないわよ……くっ」

「やばいやばい……！このままだとイカされちゃう……！」

クチャ♡♡

♡♡♡

クチャ♡♡

♡♡♡

♡♡♡

「ア、アナタ達ねえ……さっきから調子に乗りすぎ  
シドの友達だから少しは我慢してたけどいい加減に」

「はいはいお姉さん、この写真見てももらえますか?」

「は? な、なんなのよ……え、これ私?」

「実はですね、以前マッサージで寝ていたところだ  
気持ちよくなってもらってたんですよ」

「他にも沢山写真があるのでシドくんにバラされたくなくなかったら……」

「わかりますよね?」



「……………」

「えええーってクレアさん？」

「……………」

「どうしようもこんな状況なのだ……………」

「コイツらのいどなんつてどいつでどいつのどいつの続きをいつて貰えるなら……………」

「やべえ、逆効果だったかも」

「鬼みたいな顔になってますけど……………」でボク達○されたりしませんよね!？」

「わ、わかったわよ……………そのかわり絶対内緒にしてよね」

「た、助かった!」

「媚薬のお陰ですね。けど……………」強気に出るのは次から控えましょう」



「はあ…はあ…もういいですよね？ボクとキスをしましょう  
ほら早く口を開けてください」

「キ、キスだなんていきなりそんな…んんっ!!」

「キスでも女性ホルモンが活性化されて綺麗になりますからね！」  
「じゅるるるるっ♡んっ…ぞっ…そんな効果聞いたことない…んん」

はあ♡♡

ちゅっ♡

は♡

っ♡  
っ♡

っ♡  
っ♡

ちゅっ♡

はあ♡♡

っ♡  
っ♡

「ほらもっと舌を出して口を溜めた唾液交換してください」

「がっがっしきすき…わかったから…んんっ！」

「さつきは止められちゃいましたけどおま○ご舐めますね」

「え……駄目よそんなところ舐めるだなんて」

「息がおま○ごに当たってすぐ潰りたい……は、早くして」

「でもお姉さん、さつき顔を近づけた時に内心、こうされることを期待してましたよね？」

「ば、馬鹿なこと言わないで、そんなわけないじゃない」

「なんでバレてるのよ……」

はっ♡

ドキ♡  
ドキ♡

はっ♡

「嫌がるフリをしても凄く期待した目で見てましたからねー」

「心配しなくても存分に舐めてあげますから気持ち良くなってください」

「アナタが舐めたいだけじゃない……この変態……!」

「え、じゃあ舐めるのやめましようか？」

「ちよつと待って、やめるとは言っていないわよ……アナタほんとムカつくわね」



ん...ん...ん...

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「ひっ！……なんなんでものを出しているのよ」

「お姉さんち○ぽを出したくらいでそんなに驚かないで」「だっだっでっごんな目の前で見るとなんて初めてだし……」

「じやあ慣れるために今日頑張りましたよ」

「慣れるって何をさせるつもりなのよ」

「そりやあもう俺達を気持ち良くしてくれただけでいいですから」



「うーこれを啜えればいいの?」

「しっかりと唾液を絡めて舐めてください。菌は立ててならいようお願ひします」

「注文が多いわね……やるだけやってみるわ」

はあー♡

はあー♡

「あー、前からち○ぽを舐めるお姉さんの姿を妄想してたけど  
実際こうなると興奮凄えわ」

「そんな変態じみたこと普段から考えてたなんて……  
シドに悪い影響与えないでよね」

「じゃあ……で発散させてください」





ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

「まだ飲み込んでないですよね？口を開けて精液を見せてください」

「いいきなり射精するなんて」

「嫌がっていたのに必死にち○ぽ舐めてましたね」  
カシヤカシヤ

はあー♡♡

はあ♡♡

「ちよつと！なに写真撮ってんのよー！」

「今の姿が凄くエロかったのをつい……」

「それでまた脅迫しようってんじやならでしようね」

「まあまあお姉さん、まだしてもらいたらいくら何でもあるのでスツドで横になっってください」

「はーこれ以上何をしようってらうのよ……」





♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡



んんん

んんん

ミクミク

んんんんんん

んんん

んんん

んんん

ミクミク

んんん

んんん

「断りもなしにいきなり中に出すなんて……」

「っっっい気持ち良すぎて出しちゃった」

「この光景も写真に収めておきましょう」

「っっっごらー！また勝手に写真なんか撮らないでー！」

「精液が垂れた無様な姿ですけど綺麗ですよ」

「なんでこんなこと……今回は仕方なく言う通りにしてあげたけど次からは脅しても無駄だからね」

ぐん

はぁ

はぁ

じゅん

（ほとんど娼業のお陰だし事前に飲ませたらまたやれそうだな）

（まだまだお姉さんとスケベなことしたいですね  
次はいつにしましょうか）

「何をソソソ話してるのよ……まったく」

「こんなことして○されないだけありがたいなさい」

「凄く恥ずかしいポーズを取りながら言う台詞じゃないよな」







































